

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

須 田 孝 司

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第16巻第1号（2017年9月）抜刷

【論文】

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

須田 孝司

1. はじめに

数年前、会社内の公用語を英語にすると宣言した日本企業が話題を集めたが、多くの日本の企業では、英語を公用語として使用しないまでも、新入社員の採用だけではなく、海外出張や昇進の際に Test Of English for International Communication (TOEIC) のスコアを参考にしているようである (IIBC, 2013)。また、最近では、日本の大学においても、TOEIC のスコアを英語の成績に反映させたり、卒業要件に加える大学が増えてきている。

本学の国際関係学部では、TOEIC IP のスコアが中期計画において具体的な目標として示され、さらに2016年度からは、TOEIC IP のスコアが必修英語の成績に反映されるようになった¹。したがって、TOEIC のスコアが基準に達していない学生は、必修単位を修得することができず、結果として大学を卒業することができないようになった。つまり、TOEIC IP のスコアが卒業要件に加わったと考えることができる。

本学部を志望し入学してくる学生の多くは、海外に興味があり、比較的英語が好きであるように感じられる。しかし、実際に英語を教えてみると、英語に関する様々な知識やスキルが不足しているように思われる。そこで、本稿では、2013年度から2015年度までの3年間の TOEIC IP のスコアを分析し、学生の英語力の課題について検証を行う。そして、学生の英語力を高めるためには、今後どのような英語の授業が求められるのか提案したい。

2. TOEIC の概要

TOEIC は、TIME Inc. アジア総支配人であった北岡靖男氏が日本人の英語コミュニ

1 TOEIC IP とは、TOEIC Institutional Program の略称であり、TOEIC Listening & Reading 公開テストの過去問を利用している。TOEIC IP の実施については、賛助会員になった団体が、自分たちで試験会場や日程を独自に設定することができ、試験の運営も実施団体に任されている。

ケーション能力を高めるため、1977年にアメリカの English Testing Service (ETS) に働きかけ、開発されたものである (McCrosite, 2010)。現在では、日本にある一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) がその運営を行い、多くの日本人が TOEIC Listening & Reading 公開テスト (TOEIC L&R) を受験している。TOEIC には、TOEIC L&R の他に TOEIC Speaking & Writing と TOEIC Bridge の 2 種類があるが、TOEIC Speaking & Writing は受験者数が少なく、TOEIC Bridge の主な受験者は高校生であるため、大学生や社会人を対象とした TOEIC のスコアとなると、TOEIC L&R のスコアを指す場合が多い。本学でも、TOEIC L&R の IP テストを利用している。

TOEIC L&R は、リスニングとリーディングの 2 つのセクションに分かれており、各セクションの出題数は 100 問である²。また、それぞれのセクションの最低点は 5 点、最高点は 495 点となっており、TOEIC のスコアは 10 点から 990 点まで、5 点刻みで受験者に示される³。

セクションごとの構成を見ていくと、まずリスニングセクションは、試験時間が約 45 分間であり、表 1 のように Part1 から 4 まで 4 つのパートに分けられている。

表 1 2016年 5 月以降の TOEIC L&R リスニングセクション (ETS, 2016, p.8より改変)

Part	パート名	内容	問題数
1	Photographs	写真描写問題	6
2	Question-Response	応答問題	25
3	Conversations	会話問題	39
4	Talks	説明文問題	30

Part1 は、写真に関連があると思われる短い 4 つの英文が流され、その写真について説明している最も適切な英文を 4 つの選択肢の中から選ぶというものである。Part2 は 1 つの質問とそれに対応する 3 つの英文が流され、その質問に対して最も適切な英文を選ぶ問題である。Part3 は、2 人以上による会話文であり、Part4 は、これまでより長い会話文やナレーションである。その両パートには、各会話の内容に関する 3 つの質問とそれぞれの質問に対する 4 つの選択肢がある。受験者は、その 4 つの選択肢から質問の答えとして最も適切なものを選ばなければならない。Part1 から 4

2 2016年 5 月実施のテストより、各パートの設問数が見直され、Part 1、2、5 では設問数が減り、Part 3 と 6 では設問数が増えた。また、リスニングやリーディングの内容を問う問題以外に、話し手や書き手の意図を問う問題も新たに出題されるようになった。

3 TOEIC のスコアは素点ではなく、偏差値をもとにしたものである。したがって、時々 990 点を取った人に対して「TOEIC で満点を取った」と見聞することがあるが、そのような人でも必ずしも 200 問すべてに正解したというわけではない。

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

になるに従い、流れる英文の量が増えおり、それに伴い、より多くの情報を保持することが求められている。

リーディングセクションの構成は、表2のように3つのパートに分けられている。リーディングセクションの問題数は100問あり、試験時間は75分である。

表2 2016年5月以降のTOEIC L&R リーディングセクション (ETS, 2016, p.8より改変)

Part	パート名	内容	問題数
5	Incomplete Sentence	単文穴埋め問題	30
6	Text Completion	長文穴埋め問題	16
7	Single Passages	1つの文書	29
	Multiple Passages	複数の文書	25

各パートについて見ていくと、Part5は短い文の穴埋め問題であり、Part6では5行以上から成る文章の中にいくつか空所がある。各設問には、その空所に対応する単語や語句、または一文が4つあり、Part5と6では、その4つの選択肢の中から最も適切なものを選ぶというものである。Part7では、空所の穴埋めではなく、各文書に関する質問について、4つの選択肢の中から最も適切な答えを選ぶことが求められる。Part7になるとEメールや広告、チャットといった多様な形式の英文が使われており、英文の長さも様々である。

3. 日本人のTOEIC L&Rのスコア

TOEICは、2000年度にはすでに全世界で100万人以上が受験しており（IIBC, 2017）、2005年の報告書によると全受験者の67%は日本人であった（ETS, 2005）。2013年の国別平均スコア（IIBC, 2014）では、リスニングセクションが283点、リーディングセクションが229点、合計512点となっており、日本の順位は48か国中40位である。このように他の国々と比べ、日本人の平均スコアの順位が低迷しているため、日本人は他の国の人と比べ英語ができないと言われる所以になっている。

日本人のTOEIC L&Rのスコアについてより詳しく見ていくと、表3のように2015年度（2015年4月から2016年3月）では、リスニングとリーディングの両セクションにおいて、社会人のスコアは学生のスコアより高くなっている。

表3 社会人と学生の平均スコア (IIBC、2016、p.6 II-2より改変)

	リスニング	リーディング	合計
社会人 (437,703人)	332	276	667
学 生 (427,425人)	310	252	562
平均	321	264	585

また、表3における学生のうち、高校生や高専生、大学院生を除いた大学生のスコアを表4に示す。

表4 大学生の平均スコア (IIBC、2016、p.6 II-4より改変)

	リスニング	リーディング	合計
大学生 (320,262人)	311	256	568

大学生の平均スコアは、表3の学生の平均スコアより多少高くなっているが、受験する全学生のうち、大学生が約8割を占めるという状況から考えると、表3の学生の平均スコア(562)は、表4の大学生の平均スコア(568)をほぼ反映したものになっていると言える。

本稿で示す本学部のデータは、TOEIC IPのスコアであるため、ここではTOEIC IPのスコアについても見ていく。2015年度の大学生のTOEIC IPの平均スコアを表5に示す。

表5 大学生のTOEIC IPの平均スコア (IIBC、2016、p.9 V-1より改変)

学 年	リスニング	リーディング	合計
大学1年 (226,406人)	239	188	427
大学2年 (101,003人)	250	189	438
大学3年 (71,486人)	273	209	482
大学4年 (24,386人)	284	218	502
平均 (423,281人)	262	201	462

TOEIC IPは、多くの大学がクラス分けや単位認定、さらには成績認定の際に利用しており、TOEIC L&Rを受験する大学生より人数が多い。しかし、TOEIC IP受験者の中には、クラス分けや成績認定などのために、半ば受験を義務付けられていると感じている大学生も含まれているため、TOEIC IPの平均スコア(L: 262, R: 201)

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

はリスニング、リーディングとも公開テストのスコア（L: 311, R: 256）より低くなっている。

さらに、IIBC（2016）では、専攻別のスコアも提示している。2015年度に受験した国際関係学部系に所属している大学生の平均スコアを表6に示す。

表6 国際関係学部系の大学生のTOEIC IPの平均スコア（IIBC、2016、p.10 V-2より改変）

学 年	リスニング	リーディング	合 計
大学1年（10,249人）	257	141	448
大学2年（5,478人）	278	206	484
大学3年（4,152人）	308	230	538
大学4年（1,268人）	314	233	547
平 均（21,147人）	276	205	481

表5と表6を比較すると、国際関係学部系の学生の平均スコアは、大学生の平均スコアより19点ほど高く、特に、リスニングのスコアに差がある。

これまで日本人英語学習者のTOEICの平均スコアを見てきたが、日本人は概してリーディングよりリスニングのスコアの方が高くなっていることがわかる。日本人の英語力に関する世間一般の批判として、日本人は英語の聞く話すが苦手だとよく言われているが、TOEICのスコアからは、リスニングよりリーディングの方が問題であると考えることができる。

また、表6の大学生は、2年から3年にかけてTOEIC IPのスコアが伸びている。上述したようにTOEIC IPは、クラス分けや成績認定の際に利用されることが多く、特に1、2年生の場合、TOEIC学習の動機付けが400点さえクリアすればよいといった最低限の目標であるのに対し、3年生からは就職を意識し、さらに高得点を目指すといった取り組みに代わるということがその要因と考えられる。IIBCが行ったアンケート調査（IIBC、2013）によると、アンケートに回答した228社の中でTOEICのスコアを採用の際「参考にする」、または「参考にすることがある」と回答した企業は約7割に達する。つまり、大学生は3年になると自分の就職を有利にする手段の1つとして、TOEICを活用しようと考え、その結果3年生のスコアが急激に上昇すると思われる。

大学生のうち国際関係学部系の学生に目を向けてみると、1年から2年、2年から3年と学年が上がるに従い、リーディングのスコアが伸びている（1年から2年では65点、2年から3年では24点）。また、国際関係学部系の学生のスコアは、他の大学生のスコアとは異なる特徴があり、1年生の時にはリスニングのスコアが高く、逆にリーディングのスコアが顕著に低い。このような傾向は本学部の学生にも当てはまる

が、他の人と英語でコミュニケーションを取ることは好きだが、しっかりと英文を理解していくということが苦手な学生が多いことの表れではないかと思われる。そもそも国際関係学部系に入学してくる学生は、ある程度英語が好きな学生が多いため、リーディングを通して、語彙や文法だけではなく、さらに高度な英文解釈力を身につけることができれば、TOEIC のスコアは必然的に高くなっていくと考えられる。

4. 本学部の TOEIC IP のスコア

4.1. セクションごとのスコア

2013年度から2015年度にかけて実施した3年間の TOEIC IP の平均スコアを表7に、そのグラフを図1に示す。

表7 TOEIC IP の平均スコア (スコア (SD))

		リスニング	リーディング	合計
2015年度	2年 (144人)	309.51 (74.38)	254.44 (76.40)	563.96
	1年 (198人)	309.09 (71.35)	248.99 (78.68)	558.08
2014年度	2年 (130人)	316.04 (77.01)	242.04 (77.12)	558.08
	1年 (196人)	313.37 (69.82)	241.02 (65.98)	554.39
2013年度	2年 (147人)	316.36 (68.25)	270.37 (76.79)	586.74
	1年 (169人)	303.02 (63.87)	257.37 (75.20)	560.39
平均点		311.23	252.37	563.60

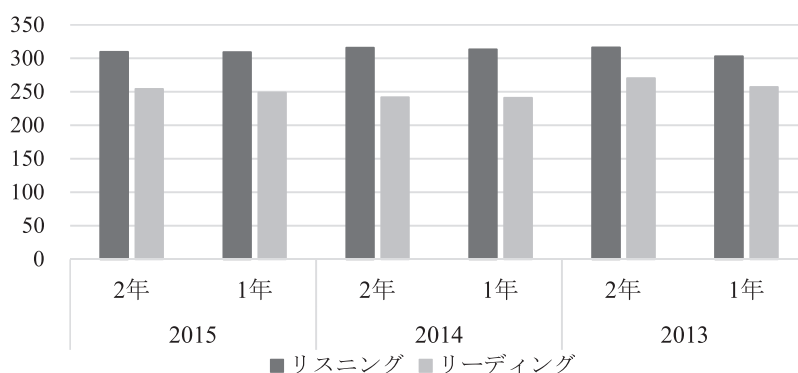


図1 TOEIC IP の平均スコア

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

3年間の平均スコアを見てみると、リスニングセクションは311.23点であり、リーディングセクションは252.37点となっており、リスニングのスコアがリーディングのスコアより約59点高いことがわかる。これは表4の大学生のTOEIC L&Rの平均スコアとほぼ同じである。三要因（年度×学年×セクション）の分散分析を行うと、年度間と学年間に有意差はなかった（年度： $F(2, 978) = 1.393, p > 0.2 ns.$ ；学年： $F(1, 978) = 1.87, p > 0.1 ns.$ ）。しかし、セクション間に有意差があり（ $F(1, 978) = 1140.963, p < 0.01$ ）、リスニングのスコアがリーディングのスコアより高いことがわかった。また、年度とセクションの間に交互作用が見られ（ $F(2, 978) = 20.67, p < 0.01$ ）、多重比較の結果、13年度は14年度と15年度よりリーディングセクションのスコアが有意に高いことが明らかになった。

4.2. 項目の比較

TOEICでは、セクションごとのスコア以外に、項目ごとのスコアも把握することができる。項目とは、各パートのスコアや正答率ではなく、表8のように文の長さや出題傾向をもとに正答率を表したものである。

表8 項目の内容

リスニング		
項目	関連箇所	解説
1	Part 1 と 2 の推測を伴う問題	短い会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
2	Part 3 と 4 の推測を伴う問題	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどの中で明確に述べられている情報をもとに要点、目的、基本的な文脈を推測できる
3	Part 1 と 2 の詳細を問う問題	短い会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
4	Part 3 と 4 の詳細を問う問題	長めの会話、アナウンス、ナレーションなどにおいて詳細が理解できる
リーディング		
項目	関連箇所	解説
1	Part 7 の推測を伴う問題	文書中の情報をもとに推測できる
2	Part 7 の詳細を問う問題	文書中の具体的な情報を見つけて理解できる
3	Part 7 で複数の情報を紐付ける問題 (+Part 6 の文脈型)	ひとつの文書の中でまたは複数の文書間でちりばめられた情報を関連付けることができる
4	Part 5 と Part 6 の語彙問題 (+Part 7 の同義語問題)	語彙が理解できる
5	Part 5 と Part 6 の文法問題	文法が理解できる

リスニングセクションは4つの項目、リーディングセクションは5つの項目に分けられており、これらの項目の正答率を検証することで、受験者はどのような英文に対して正答率がいいのか、またどのような問題が得意であるのか判断することができる。表9にリスニングセクションの項目別正答率を示す。

表9 リスニングセクションの項目別正答率(スコア(SD))

		項目1	項目2	項目3	項目4
2015年度	2年	67.92 (15.03)	58.96 (17.47)	71.63 (13.91)	60.29 (16.13)
	1年	67.22 (15.55)	60.15 (17.60)	71.34 (13.33)	60.04 (15.52)
2014年度	2年	67.45 (15.17)	65.74 (16.12)	71.95 (14.44)	55.45 (17.27)
	1年	68.13 (13.42)	64.36 (15.89)	71.94 (13.23)	54.66 (14.74)
2013年度	2年	62.91 (13.69)	61.30 (15.36)	74.66 (13.60)	67.68 (13.68)
	1年	59.02 (14.61)	62.41 (15.07)	72.20 (13.78)	64.24 (12.99)

リスニングの項目1と3は短い英文であり、項目2と4は長い英文である。三要因(年度×学年×項目)の分散分析の結果、年度間と学年間に有意差はなかった(年度： $F(2, 978) = 0.39, p > 0.6 ns.$; 学年： $F(1, 978) = 1.096, p > 0.2 ns.$) が、項目間には有意差があり($F(3, 2934) = 303.063, p < 0.01$)、項目4<2<1<3の順で正答率が高くなることが分かった。また、年度と項目の間に交互作用が見られ($F(6, 2934) = 64.428, p < 0.01$)、多重比較の結果、2015年度は項目4=2<1<3、2014年度は項目4<2<1<3、2013年度は項目1=2<4<3の順で正答率が高くなっていることが確認された。この結果より、2015年度と2014年度では、項目1と3の短い英文の正答率が高いが、2013年度は、長めの会話やナレーション(項目4)の理解においても比較的高い正答率を示していることが明らかになった。つまり、2014年度の学生から、長めの英文の理解が難しくなっていると考えられる。

リーディングセクションの項目別正答率を表10に示す。

表10 リーディングセクションの項目別正答率(正答率(SD))

		項目1	項目2	項目3	項目4
2015年度	2年	52.01 (17.95)	61.86 (18.66)	48.60 (15.18)	62.56 (15.94)
	1年	64.42 (13.84)	49.02 (17.61)	59.81 (18.40)	49.60 (14.11)
2014年度	2年	62.23 (16.93)	63.86 (15.29)	51.62 (17.41)	49.34 (18.78)
	1年	44.19 (15.15)	54.66 (13.97)	55.05 (14.94)	50.40 (16.85)
2013年度	2年	48.97 (15.89)	42.44 (14.66)	55.20 (12.48)	55.33 (13.00)
	1年	62.89 (19.43)	63.88 (18.17)	54.77 (15.21)	52.94 (13.20)

リーディングの項目1、2、3はPart7の英文の読みに関する問題であり、項目4は語彙、項目5は文法の問題である。三要因（年度×学年×項目）の分散分析の結果、学年間に有意差はなかった（ $F(1, 978) = 2.408, p > 0.1 \text{ ns.}$ ）が、年度間と項目間には有意差があった（年度： $F(2, 978) = 45.975, p < 0.01$ ；項目： $F(4, 3912) = 249.494, p < 0.01$ ）。年度間の多重比較では、2014年度<2015年度<2013年度の順で正答率が高くなっており、項目では3<1<2=4<5の順で正答率が高くなることが分かった。また、年度と項目の間に交互作用が見られ（ $F(8, 3912) = 62.891, p < 0.01$ ）、英文の読みに関する項目1から3では、2015年度と2013年度の正答率が高くなっていた（項目1：2014年度=2015年度<2013年度；項目2：2014年度<2015年度=2013年度；項目3：2014年度<2015年度<2013年度）。語彙の問題（項目4）では2015年度が最もよくできており（2013年度=2014年度<2015年度）、文法問題（項目5）では、2013年度の正答率が高くなっていた（2014年度<2015年度<2013年度）。つまり、文法問題の正答率の高い年度は、比較的長い英文の理解においても高い正答率を示す傾向があると言える。

5. 本学部の英語力に関する課題

大学生は就職活動にTOEICのスコアを利用することを考えるようになるため、TOEICに対する動機づけが高まり、3年生から4年生にかけてTOEICの平均スコアは高くなる。本稿で示した国際関係学部のTOEIC IPのスコアには、3年生以上の学生のデータは含まれていない。また、本学では2015年度までTOEIC IPのスコアが卒業要件でもなかったため、TOEIC IPの受験に際し、1、2年生がそれほど自発的な動機づけを持っていなかったということも予測できる。したがって、本学部の学生も3年生以上ではもっと高い平均スコアを取っているかもしれないが、本稿ではそのことについては何も言えない。

セクションや項目ごとのデータを見ていくと、本学部の学生はリーディング力が低く、長めの英文を読み、文章の情報を関連付ける力や推測する力が不足しているということが明らかになった。さらに2013年度と比較すると、2014年度以降はリーディング力だけでなく、文法能力の低下も見られた。つまり、文法問題の正答率の高い2013年度の学生は、英文の推測や理解においても正答率が高いことから、リーディング力をつけるには、リーディング活動を通して英文読解力を育てるだけでなく、文法知識の拡充も必要であると思われる。中村（2016）では、日本人大学生のために開発されたVisualizing English Language Competency Test (VELC (ベルク) テスト) と英語の基礎力を測るReading Vocabularyテスト、Listening Vocabularyテスト、Basic GrammarテストからなるRLGテストの結果を比較し、基礎的な文法力がリーディング力だけでなく、総合的な英語力にも影響を与えていると提案している。

リスニング力については、本学部の学生は、1年時から大学生の平均スコアより高いようであるが、2014年度からそのリスニングセクションのスコアも徐々に落ちてきている。特に長い英文の聞き取りということになると、推測することも正確に内容を理解することも困難になるようである。浅野・須藤(2006)では、音を処理する速度は読解速度と関連があるだけでなく、読解力とも関連しており、読解能力が高い日本人学習者は、リスニング力も高くなるということを報告している。つまり、リスニング力をさらに向上させるためには、リスニング活動を行う以外に、文法の指導やリーディング活動を行う必要があるのではないかと思われる。リーディング力をつけるためには、精読や英文解釈だけを行うのではなく、語彙力や文法力をつける活動はもちろんのこと、長めの英文を使い、スキミングやスキミング等のリーディングスキルを身につけることも求められる。さらに、自らが身につけた英語の知識が自動的に活用できるように速読などの活動も行うことが重要になる。このように本学部の学生の課題であるリーディング力を高めることができれば、2013年度の2年生のようにリスニング力の向上にも期待できる。

6. 終わりに

本稿では、2013年度からの3年間のTOEIC IPの結果をもとに、国際関係学部の学生の英語力の問題点について検証を行った。本学部の学生は、1年生の時からリスニング力はある程度認められるものの、2年生になっても英語力はあまり向上していない。そこで、本稿では、文法力を含め、リーディング力を高める授業の必要性を提案した。ここ数年、学部改革だけではなく、英語の授業にも変化が求められているが、本稿の検証結果が何らかの形で反映されれば本望である。

参考文献

- 浅野恵子・須藤路子. (2006). 「英語読解速度・語彙力と TOEIC スコアの関連性の分析－日本人英語学習者におけるリスニング力とリーディング力の上達要因－」『日本音声学会創立80周年記念式典・第20回全国大会』順天堂大学. p. 102.
- Educational Testing Service. (2005). TOEIC Report on Test Takers Worldwide - 2004. NJ.: ETS.
- Educational Testing Service. (2016). 『TOEIC テスト公式問題集 新形式問題対応編』東京: IIBC.
- IIBC. (2013). 『「上場企業における英語活用実態調査」報告書』東京: IIBC.
- IIBC. (2014). 『TOEIC テスト Worldwide Report 2013 <抜粋>』東京: IIBC.
- IIBC. (2016). 『TOEIC Program Data & Analysis 2016』東京: IIBC.
- IIBC. (2017). 「TOEIC Program の理念－TOEIC Program の歴史－」『TOEIC』

学生の英語力と効果的な指導に対する提言

<http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what/philosophy.html> (2017年2月5日閲覧)

McCrostie, J. 2010. The TOEIC in Japan: A scandal made in heaven. JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter, 14(1). pp.2-10.

中村弘子. (2016). 「文法基礎知識と英文読解力の向上」『公立鳥取環境大学紀要 第14号』 pp.89-93.